

受 付 番 号	2025-33		
許 可 番 号	大歯医倫 第 111425 号		
研究課題名	歯学部学生の口腔清掃習慣や口腔清掃状態と口腔関連 QOL の関連：教育効果を踏まえた横断研究		
研究責任者	河村 佳穂里	申 請 者	河村 佳穂里
研究終了日	2027 年 3 月 31 日		
所 属	口腔衛生学講座	所 属	口腔衛生学講座
職 名	講師	職 名	講師
申請の概要			

近年、口腔衛生状態の改善は、う蝕や歯周病予防だけでなく、全身の健康や生活の質（QOL）維持にも寄与することが報告されている。特に歯間部プラークは歯肉炎や歯周病の主要なリスク因子であり、歯ブラシのみでは十分に除去できないため、デンタルフロスなどの補助的清掃用具の使用が推奨されている。しかし、これまでの報告では、大学生や若年層におけるデンタルフロスの使用率は依然として低い。例えば、Rimondini らの研究では大学生の約 92%が 1 日 2 回以上ブラッシングしていたものの、毎日フロスを使用している学生はわずか 15%にとどまっていた。また、日本の歯学部学生を対象とした研究でも、デンタルフロスの使用率は 2～3 割程度であり、十分とは言えない状況である。

一方、口腔清掃行動と実際の口腔内状態との関連については、多くの疫学研究で検討されてきたが、歯学部学生を対象とし、デンタルフロス使用・口腔衛生状態・口腔関連 QOL を同時に評価した研究はほとんどない。特に、PCR（Plaque Control Record）や OHI-S（Oral Hygiene Index-Simplified）といった客観的な清掃状態指標と、GOHAI（Geriatric Oral Health Assessment Index）に基づく主観的な口腔関連 QOL を同時に測定することで、清掃行動・臨床所見・QOL の三者の関係を包括的に評価できると考えられる。歯学部学生は将来的に口腔保健指導を行う立場となるため、自らの口腔清掃行動や口腔衛生状態、口腔関連 QOL を正しく把握することは、教育的にも大きな意義がある。

本研究では、医学部学生を対象に、フロス使用頻度と口腔衛生状態、口腔関連 QOL との関連を明らかにすることを目的とする。